

グレン・グールドによるピアノ演奏「運命」

音楽を聴いていい曲だなあと思うことはしょっちゅうだが、鳥肌が立つような衝撃的な経験というとめったにない。そんな数少ない経験のうち、今でも鮮明に覚えているのは中学一年生の時に聴いたグレン・グールドのピアノ演奏である。

ぼくは音楽部に所属していて、練習が早く終わったので、顧問の先生が部員を集めてレコード（CDではなく）を聴かせてくれたのだ。それが、カナダのピアニスト、グレン・グールドの作品、ベートーヴェンの交響曲第五番「運命」だった。

「運命」は通常オーケストラで演奏される楽曲だが、グールドが弾いたのはハンガリーの音楽家フランツ・リストがピアノ演奏用に編曲したものである（ちなみにリストはベートーヴェンの全交響曲をピアノ用に編曲している）。オーケストラの多彩な音響をたった一台のピアノで表現するなんて、その圧倒的な表現力、技巧性に鳥肌がたったのだ。

実は、「ピアノの魔術師」と呼ばれたリストの右手の石膏型が、ワイマールのリスト博物館に残されている。それによると、リストは指の付け根から指先までの長さが、人差し指が一センチメートル、中指が一センチメートルあり、オクターブを超えて一二度から一三度まで届いたのではないかと言われている。日本の成人男性の中指の長さは平均八センチメートル程度なので、いかに大きな手であったかがわかるだろう。レコードには楽譜が付けられていて、顧問の先生は「弾けるものなら弾いてみよ」といった無言の威圧感さえ感じると言っていたのを覚えている。大きな手の「魔術師」ならではの、難度の高い技巧の見せ場が数々ちりばめられる楽曲にリストは仕上げている。

その難曲をグールドは見事に演奏しきっている。いま聴くと、ややスローテンポにも思え、もしかすると、あの天才ピアニストにしてこのテンポが精一杯のところだったのかもしれない。しかし、それがぼくにはかえって「運命」の壮大な世界にさらなる深みをあたえているようにも思えるのだ。あるいは、グールドは

意図的に通常の「運命」のテンポを採らなかったのかもしれない。音楽の「普通」(「こういうものだ」という常識)をぶち壊すため、あるいは演奏家としての「自分」を解体させるために。そうでなければ、オーケストラの楽曲をわざわざピアノ演奏する意味はないだろう。

つまり、グールドの音楽性とは、音楽を解体するために演奏する、そういう逆説的な性格のものであり、そのような意味で、グールドは単なる演奏家ではなく、まさに表現者、思想家なのだ。